

■ 1) 情報交換 4 点

▼「こどものまち」をやろうとしたきっかけ、動機

2003年に「ミニさくら」をNPO法人市川子ども文化ステーションのこども、大人約20人が体験、見学し、「こんなおもしろいことを市川でもやりたい!」と、中心になってほしい同法人の主に中高生、青年会員に呼びかけ、「ミニいちかわ」の開催に至った。

▼準備から参画している子どもたちは、??人、(年齢層別に)

毎年5月頃から主催団体の中高生・青年会員がスタッフを呼びかけ、月2～4回のスタッフ会議を開催、毎回平均15～20人が集まり「ミニいちかわ」のしくみを考えていく。当日は更に声をかけ、約60人の中高生・青年スタッフが当日のまちの運営にあたる。近年では学生ボランティアの参加もある。

▼子どもたちを、どう集めるかへの工夫、悩み

主催団体の会員が中心のため、他の行事との兼ね合いもあり、中心メンバーが忙しくなりすぎてしまう等の悩みもある。会員以外のスタッフを集めるため、スタッフ募集のチラシを市内中学、高校などに配布したり、友達に直接声かけをしたりしている。また昨年は当日のミニいちかわ内に「ミニいちかわ」ブースを設けるなどしてどのような「ミニいちかわ」がいいのか、開催のアイディアを提案し合うなどをし、次回開催へのヒントとしている。関心のある子には次年度のスタッフにも誘う。

▼より主体的に参画してもらうための工夫、悩み

当日のまちの運営を中高生・青年が中心となっていることで、市民となるこどもたちへの異年齢の関わり生まれ、大人ではできない効果を生んでいる。一方中高生スタッフの意識の差があり、全てのスタッフが良い関わりを持てるためにどうしたら良いかの課題がある。後方支援にまわる大人スタッフは、年間を通してこどもとどう関わっていくか、学習の機会を作っている。当日スタッフとして参加する大人に対しては、受付時にスタッフが丁寧に”大人の心得”を説明することで「こどもを見守り、手出し口出しはないように」との理解を促し協力を得るようにしている。関わった大人は、こどもの力に驚き、こどもが主体的に参画することへの意識の变革を促す効果がある。しかし、幼児付き添いの大人に対しての意識付けができにくく、毎回こどもへの”口出し”が多い。幼児の参加をどうしていくかは今後の課題となっている。